

2015 第八回 台日原住民族研究論壇  
日台原住民族研究フォーラム  
8<sup>th</sup> Taiwan-Japan Forum on Aboriginal Studies

太魯閣族抗日戰爭史  
Endaan tmgjijai 學術研討會  
Truku ni Nihung

タロコ族対日戦争史(タロコ戦役)シンポジウム  
Conference on History of the Truku-Japan War

## 專題演講

專題演講 1 日本的台灣原住民族研究

笠原政治

台湾の原住民族と日本の民族学・文化人類学

(會議論文未經作者同意不得轉載引用)

# 台湾の原住民族と日本の民族学・文化人類学

笠原政治

横浜国立大学 名誉教授

## 【要旨】

日本の民族学・文化人類学では、学問の萌芽期にあたる第二次世界大戦前から台湾原住民族の研究が盛んに行われてきた。その流れは形を変えて戦後の研究者に引き継がれ、現在もこれまでの実績を踏まえた研究、そして新しい着想に基づく研究が続いている。

本講演では、そのような日本の民族学・文化人類学における台湾原住民族の研究を三つの時期に分けて概観し、その上でいま直面しつつあるいくつかの問題を示したい。三つの時期というのは次の通りである。

- 一、1945 年以前。
- 二、第二次大戦後およそ 20 年近い実地調査の空白期を経て、台湾現地での研究が再開された 1960 年代半ばから 1980 年代まで。
- 三、台湾で原住民族をめぐる社会状況が大きく変化し、それに伴って研究活動が新たな局面を迎えた 1990 年代から現在まで。

# 台灣的原住民族與日本的民族學、文化人類學

笠原政治

橫濱國立大學 名譽教授

## 【摘要】

在日本的民族學、文化人類學，從正值學問萌芽期的第二次世界大戰前開始，台灣原住民族的研究便一直盛行至今。學界的發展改變了形態，為戰後的研究者所繼承，現在有以過去的實際成果為依據的研究，以及也有以新的構想為基礎的研究，皆持續進行著。

在本次演講中，將這樣的日本民族學、文化人類學中的台灣原住民族的研究分為三個時期，並概觀來談，且在此之上，想提出現在面臨的某幾個問題。所謂三個時期，如下。

- 一、1945 年以前。
- 二、第二次世界大戰後將近約 20 年經過實地調查的空白期，而台灣本地的研究重新展開的 1960 年代中期至 1980 年代。
- 三、在台灣與原住民族有關的社會情況發生巨大變化，從伴隨此一改變，研究活動迎接了新局面的 1990 年代到現在。

（譯者：廖彥琦）

## 1. 序

日本の民族学あるいは文化人類学（以下「民族学／人類学」と略称する）は、これまで 100 年以上にわたって台湾原住民族の研究を行ってきた。最初期の研究者たちから数えれば今の私たちはおよそ 5、6 世代目に当たる。長い年月の間に研究の内容は移り変わってきたが、学術的な関心そのものはリレー競技のバトンのように世代を超えて受け継がれてきたのである。

本基調講演では、そのような研究の軌跡を簡単に振り返ってみたい。ただし、台湾原住民族の詳細な研究史はすでに末成道男その他がまとめているので、個々の著書や論文についてはそれらの参照を願うことにして、ここでは研究の大ざっぱな流れと傾向、今日の研究活動が直面している問題などを中心に述べる。

現在、日本の民族学／人類学界で台湾原住民族の研究を継続的に進めている専門家は 20 人前後と見なすことができる。一時的に関与した研究者を含めてもせいぜい 30 人程度であろう。中央学会である日本文化人類学会（1934 年に日本民族学会として発足し、2004 年に日本文化人類学会と改称）の 2014 年度会員総数は 1,852 人であるから、会員全体の中でもごく一部にすぎないことは明らかである。

しかし、研究者の人数こそ十分ではないが、台湾原住民族の研究は日本の民族学／人類学において特別な位置を占めていると考えられる。その理由としては次の点が挙げられるだろう。

第一に、台湾原住民族の研究では、民族学／人類学の萌芽期に当たる早い段階から実地調査（田野調査）による資料収集が行われた。そして、第二次世界大戦前（1945 年以前）に異民族の調査がこれほど盛んに実施されたのは、この学術分野では他に類を見ない。

第二に、1945 年以前に齎された研究の成果が、曲折を経ながらも大筋において第二次大戦後の研究に受け継がれた。

第三に、過去および現在の日本人による研究活動とその実績が、現地の台湾学界で比較的良好に知られている。

以上の点は取り立てて強調すべき事柄ではないと思われるかもしれないが、日本における民族学／人類学の成立と展開、そして現状を考えた場合に、それらはいずれも台湾原住民族の研究に特有な事情を物語っているという見方ができる。次に、戦前から戦後へと時系列に沿って、その辺の事情を具体的に述べていくことにしたい。

## 2. 1945年以前の研究

第二次大戦前、日本の大学制度で民族学／人類学は独自の学術分野として十分に認知されることがなかった。植民地に創設された二つの帝国大学を僅かな例外として、その他の帝国大学や私立大学では研究も専門教育もほとんど行われなかったといつてよい。

東京帝国大学（現東京大学）には1890年代に坪井正五郎を中心とする人類学の研究室が設けられた。台湾原住民族の調査を最も早く手掛けたパイオニアの一人、鳥居龍蔵が当時そこに所属していたことはよく知られているだろう。しかし、同研究室は学術分野が理系の体質（形質）人類学（physical anthropology）であり、文系の研究者を養成したわけではない。東京大学に文化人類学の研究室が誕生したのは第二次大戦後になってからである。

1928年に開学した台北帝国大学に小規模なものながら土俗学・人種学研究室（英語の名称は Institute of Ethnology）が設置されたことは、日本の民族学／人類学にとって重要な意味を持っていた。教授はハーヴァード大学で博士号を取得した文化人類学者の移川子之蔵であり、同研究室からは日本における社会人類学の創始者・馬淵東一が育っていった。

土俗学・人種学研究室が最も力を注いだのは原住民族（当時の名称は「高砂族」）に関する一連の研究であるが、それらは日本の台湾統治が始まった直後から30年余りにわたって行われてきた先行調査の成果を踏まえ、大きく発展させた研究ということができる。統治初期の鳥居龍蔵、伊能嘉矩、森丑之助、そしてそれに続く臨時台湾旧慣調査会の調査員などは、幅広い事項について記した論考や調査報告書を次々と公刊していた。鳥居を除いて大学とは直接の関係がなく、また民族学／人類学の専門教育を受けたことのない人びとが取り組んだ調査研究ではあったが、それらの中に、台北帝国大学の発足時点ですでに得られなくなっていたような学術情報が数多く含まれていたことは間違いない。

その土俗学・人種学研究室の代表的な業績は『台湾高砂族系統所属の研究』（1935年）である。膨大な系譜と口頭伝承の収集に基づいて原住民族全村落のエスノヒストリーを追究したこの著作は、同時代のヨーロッパやアメリカにおける民族学／人類学の諸研究と比べても学術的水準の高さという点でおおよそ遜色がない。同書が現在でも研究者の必読文献になっていることは周知の通りである。

他方、台北帝国大学に先立って1926年に創設された朝鮮（韓国）の

京城帝国大学では、イギリス社会人類学の影響を受けた秋葉隆が社会学を担当し、後の改組で宗教及社会学研究室が設置された。その研究室から巣立ったのが、第二次大戦後の文化人類学界で活躍した泉靖一である。

秋葉の代表作としては、宗教学者の赤松智城との共著で出版した『朝鮮巫俗の研究』（1937-38年）が挙げられる。秋葉を含めて京城帝国大学の研究者は必ずしも朝鮮研究に専念したわけではないが、その主要な学術的関心がシャーマニズムという宗教文化に向けられたことは、台湾の場合と比べて違いが興味深い。

これら二つの大学研究室は、第二次大戦前の日本における民族学／人類学と植民地統治との浅からぬ関係を物語っている。そして、植民地の時代が過去のものとなった戦後に、両研究室を中心に進められた現地研究の流れはそれぞれ対照的ともいえる方向を辿った。それまでの朝鮮研究がほぼ完全に断ち切られてしまったのに対して、台湾の原住民族研究は主に馬淵を架け橋として戦後に受け継がれたのである。

### 3. 第二次大戦後の 1980 年代まで

馬淵東一は第二次大戦後も台湾の原住民族に関する日本語、英語の論文を発表し続け、1960年代半ばからは現地での調査活動を再開した。戦前の台北帝国大学出身者が戦後長らく研究の権威と目されることになったのであり、やがて植民地時代を経験していない世代からもその学識に啓発されて少しずつ後続の研究者が現れてきた。戦前と戦後に跨って台湾原住民族の研究を持続した人物としては他にも國分直一（考古学）や中村孝志（歴史学）などがいたが、次世代以下の研究者に与えた影響の大きさという点で馬淵は突出した存在であった。

馬淵が実地調査を再開したのとほぼ同時期に、まず当時は大学院生だった末成道男が原住民族の村落で調査研究に着手し、その後しばらくして松澤員子がそれに続いた。言語学の土田滋と併せて、それらの三人は戦後の第一世代と呼んでよいだろう。

1960年代半ばから1980年代までの期間には、限られた数の研究者がそれぞれ対象地域を決めて日本からの訪問調査を繰り返すようになった。例えば、出版社の企画で黒潮文化の会という研究グループが結成され、その活動の一環として1977年に台湾原住民族の調査が実施された。参加したのは言語学の土田滋と森口恒一、民族学／人類学の山路勝彦と笠原政治である。他にも1980年代までの期間には、小川正恭、馬淵悟、清水純、蛸島直などが実地調査に基づく研究を始めた。戦後

の第二世代が登場したといえるだろう。それは同時に、戒嚴令下の台湾を現地で見出したという最後の世代でもある。

そのような第一、第二世代の民族学／人類学研究にはいくつかの共通する特徴が見出される。ここでは二つの点を指摘しておこう。

第一に、民族学／人類学の研究といっても、大半の研究者が馬淵東一の影響を受けていたこともあり、全体として村落や特定地域の社会組織とそれに結びつく諸慣行を調査テーマにした社会人類学の研究に傾きがちであった。研究の内容にはかなりの偏りがあったといわなければならない。

第二に、戦前の日本人による研究を参照することが多く、現地調査でも原住民族の旧慣世界に拘る傾向が著しかった。未成のいう「原型モデル (archaic models) への志向」である。もちろん各研究者は原住民族が置かれていた当時の社会状況に無頓着だったわけではないが、視野が調査地における変化の様相という狭い範囲にとどまりがちになり、それらを台湾社会のマクロな変化と結びつけて掘り下げようとする姿勢は概して乏しかったといえる。

1980年代までの時期には研究者そのものが僅かだったうえ、一堂に会して意見交換をする場にさえ事欠いていた。研究活動が活発な状態だったとはとても言い難い。当時の研究者たちは、日本の民族学／人類学で台湾原住民族の研究が次第に先細りしていく、という危惧を多かれ少なかれ抱いていたのではないだろうか。そのような研究状況に目立った変化の兆候が現れてきたのは次の時期、すなわち 1990年代になってからである。

#### 4. 新たな展開——1990年代以降——

1980年代の半ばから原住民族運動が高揚し、原住民族をめぐる台湾の社会状況が急速に変わり始めた 1990年代に、日本の民族学／人類学でも大学院生を中心に研究の新たな担い手が増加するようになった。その大部分は戒嚴令の時期を体験しなかった年齢であり、それらの若手研究者をここでは仮に戦後の第三世代と呼んでおこう。

特筆されるのは、台北の順益台湾原住民博物館の助成を受けて 1994年に日本順益台湾原住民研究会が発足したことである。日本全国に散らばっている専門家を糾合したこの研究グループは、特定の大学や研究機関に台湾原住民族研究の拠点を持たない日本の学界では存在意義がきわめて大きい。第一、第二世代に加えて、第三世代の研究者もま

たそこに主要な活動の場を見出したのである。以来 2014 年までの 20 年間に、同研究会は年刊専門誌『台湾原住民研究』を全部で 18 冊、その他に資料叢書 4 冊、論文集・研究史・文献目録などの単行本 7 冊を世に送り出した。研究活動が、1980 年代までと比べて格段に活性化したことは明白であろう。

この時期には、台湾学界との学術交流も以前よりずっと拡大された。国立政治大学原住民族研究中心の主催による「台日原住民族研究論壇」が今ここに第八回を迎えているのも、相互の交流が発展してきたことを示す一つの証左といえる。また、第三世代の中には大学院在籍中に台湾へ留学し、台湾の研究者と緊密な関係を築きながら研究に従事したという若手が多い。そうした関係は、これから台日間の提携を深めていくうえで得難い絆となるに違いない。

1990 年代から現在までに行われた民族学／人類学の研究をとりあえず一括りにしてみると、それ以前の時期とはかなり異なる傾向を認めることができる。主要な三つの点を挙げておこう。

第一に、戦前の研究と資料を活用し、原住民族の旧慣に関心を寄せる傾向はなお続いているが、そうした研究に加えて、今まで埋もれていた諸資料を掘り起こし、それらを含めた形で研究史あるいは学史を検討し直す試みが数多く現れた。

第二に、従来は低調だった物質文化の研究が次第に増え、さらに博物館における展示、古い写真資料などが研究テーマとして取り上げられるようになった。

第三に、原住民族運動、原住民族の新規認定、伝統領域の問題など、同時期に進行する動きが注目を集めた。それらを日本による過去の原住民族統治と結びつけてテーマ化するのが、日本人研究者に共通する一つの特徴である。

要するに、この時期には研究者の学術的な関心が多様化したのであり、そうした傾向は第三世代の形成とともに顕著になったと考えられる。村落調査が中心だった 1980 年代までとは研究の内容が質的にも変化したとあってよい。ただし、関心の多様化は、同時にそれぞれが扱う専門領域の細分化を促す。人数の少ない研究者の間でさえ、研究の「タコツボ化」が進みかねないことを認識しておく必要があるだろう。

## 5. 台湾における日本統治時代の研究・記録への関心

日本の台湾原住民族研究を振り返るという趣旨から少し外れるが、



もう一つ、1990年代以降の台湾で高まってきた日本統治時代の研究や記録への関心を表すような動きに触れてみたい。

まず、19世紀末に鳥居龍蔵が原住民族とその生活風景を撮影した大量の写真に、台湾で熱い視線が注がれたことがある。東京大学に残っていた古いガラス乾板から日本の研究グループが写真を再生し、その一部を日本と台湾の博物館で一般公開したのであるが、反響が圧倒的に大きかったのは1994年から台湾各地で催された展示会の方であった。100年近い時間を遡る原住民族の影像是現代の人びとに強い印象を与えたに違いない。それ以後も日本統治時代の写真を復刻する動きは続き、写真を基礎資料とする研究が台湾でも日本でも増えていった。

また、戦前の日本語文献が中訳されることも多くなった。そうした翻訳書の出版に関して、とくに目覚ましい活躍を示したのは台湾の山地研究で名高い楊南郡である。

楊は初め鳥居、伊能、森という草創期研究者たちの著作を翻訳・出版して話題を呼び、その後も取り上げる文献の範囲を拡大していった。そして、近年にはおよそ7年間を費やして、先述した台北帝国大学土俗学・人種学研究室の大著を『臺灣原住民族系統所屬之研究』（2011-12年）と一部改題のうえ訳出した。原書の著者たちに匹敵するほどの学術的貢献を果たしたといえるだろう。

そのような日本語文献の相次ぐ中訳からは、また新しい問題も出てくる。上に挙げた楊の訳書に即していうと、それらは次のような点である。

第一に、翻訳書では、その訳文とそれに付された解説だけでは十分に伝わらない部分がつねに残ってしまう。例えば、各著者の知的基盤や学術的関心、当該書と他の著作との関係などである。中訳された日本語文献の場合にも、翻訳書を使いこなすためには併せてそうした周辺の事項に関する理解が求められる。

第二に、『臺灣原住民族系統所屬之研究』には、原住民族の間ですでに途絶えてしまったと考えられる系譜や移動などの口頭伝承が数多く記載されている。その中訳書が台湾で広く普及することによって、それらが過去の経緯に関する原住民族自身の認識に組み込まれる可能性を慎重に見究める必要があるだろう。研究成果の当事者への還流というのは民族学／人類学にとって一つの難問であるが、この場合にはそれが翻訳を通じた還流なのである。

それらの問題はともかくとして、日本統治時代の研究や記録につい

ては、台湾学界と日本学界の共有財産として活用できる幅が徐々に広がってきたことは間違いない。展示企画や翻訳もまた学术交流の重要な一面といえる。

## 6. 「少子高齢化」？

日本の民族学／人類学は、台湾の外、すなわち海外で台湾の原住民族に最も多大な関心を寄せている学術分野の一つである。これまでに述べてきた通り、研究の歴史もすでに 100 年以上に及んでいる。

しかし、実情としては、現役研究者の数が決して十分というわけではなく、しかも気にかかるのはその平均年齢が比較的高いことである。先ほど戦後の第三世代と呼んだ年齢層は、今ではだいたい 40 歳代に集中している。そして、それに続く大学院生などの間から専門家の志望者がなかなか出にくい状態になっているのである。研究の担い手に「少子高齢化」が進んでいるといえるかもしれない。

本講演では、第二次大戦前から戦後へと研究の流れを辿り、とくに研究の継続性という側面を強調してきた。今、その継続性をどう確保していくのか、という問題が現れてきているように思えてならない。

## 参考文献

赤松智城・秋葉隆

1937-38『朝鮮巫俗の研究』京城：大阪屋號書店。

全京秀（太田心平訳）

2006「植民地の帝国大学における人類学的研究——京城帝国大学と台北帝国大学の比較」『「帝国」日本の学知 第3巻 東洋学の磁場』東京：岩波書店、頁 99-134。

笠原政治

1998「研究史の流れ——文化人類学を中心に」『台湾原住民研究への招待』東京：風響社、頁 29-50。

宮岡真央子

2011「台湾原住民族研究の継承と展開」『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』西宮：関西学院大学出版会、頁 77-119。

日本順益台湾原住民研究会（編）

2001『台湾原住民研究概覧——日本からの視点』東京：風響社。

末成道男

2006 A Century of Japanese Anthropological Studies on Taiwan Aborigines. 『・史  
文集』臺北：順益台灣原住民博物館、頁 1-53。

・文化與族群——

2014「2013年七夕に21世紀初頭の台湾原住民研究を振り返る」『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現在』臺北：順益台灣原住民博物館、頁 369-386。

宋文薰他（編）

1994『跨越世紀的影像——烏居龍藏眼中的台灣原住民』臺北：順益台灣原住民博物館。

台北帝国大学土俗・人種学研究室（移川子之蔵・宮本延人・馬淵東一）

1935『台湾高砂族系統所属の研究』東京：刀江書院。

楊南郡（譯註）

2011-12『臺灣原住民族系統所屬之研究』臺北：原住民族委員會。